

【ポスター発表】

## 知的障害者の態度研究に関する系統的レビュー研究

○ 関西福祉大学 米倉 裕希子 (5676)

山口創生 (国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所・7353)

〔キーワード〕 知的障害, スティグマ, 態度

## 1. 研究目的

我が国は障害者権利条約に批准に向け、2013年に「障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律（以下、差別解消法）」が成立した。差別解消には、国民一人ひとりの障害に関する正しい知識の修得や理解が必要不可欠であり、行政機関、事業主はもとより、地域住民等に対する啓発活動が期待される。内閣の基本指針には、公的機関、事業者、障害者団体、マスメディア等が連携し、インターネットを活用した情報提供、ポスターの掲示、パンフレットの作成や配布、法律の説明会やシンポジウム等の開催などの媒体を用いた周知・啓発活動に取り組むと示されている。

差別や偏見に関連する概念にスティグマ (stigma) がある。スティグマは、古代ギリシャにおいて奴隷、犯罪者、謀反人であることを刻印したことから始まり、今日では対象となる人に対するネガティブな認識や態度を意味する。社会福祉分野では、精神障害者などのマイノリティ集団が他者によって与えられる、あるいは彼ら自身が持たされている不名誉なものを意味している。他の障害に比べ見えにくい特質をもつ精神障害者のスティグマは、セルフエスティームの低下、社会参加の制限、社会的ネットワークの減少、失業や住宅問題、収入の不平等などの深刻な社会的排除と関連していることが明らかになっている。スティグマは世界共通の課題であり、英国では、当事者団体、政府、民間基金団体が連携したアンチスティグマキャンペーンが行われている。

海外では、精神障害者から発展し知的障害者のスティグマに焦点を当てた研究が近年増加している。Pubmed を用いて「intellectual disability」および「stigma」をキーワードにして検索し hit した 82 研究をスクリーニングし 25 研究をレビューした (最終アクセス: 2014 年 12 月 1 日)。その結果、①知的障害者の大半がスティグマを経験している、②家族を対象とした研究はアジアや中東などの国へ広がりつつある、③一般市民における大規模調査では障害認知とスティグマの関連が指摘されている、④介入研究では間接的な接触でも態度の改善に貢献できる可能性が示された、⑤今後は、より効果的な介入プログラムの開発とその効果測定が課題である、などが明らかになった。

国内においては知的障害者にスティグマおよびネガティブな態度に関する研究の知見をまとめた研究はない。そのため、国内の研究におけるエビデンスの蓄積の程度は極めて不透明である。よって、本研究は、国内における知的障害者の態度研究の動向と課題について系統だった手法によるレビューを行うことを目的とする。

## 2. 研究の視点および方法

CiNii を用いて「障害」および「態度」をキーワードにし検索した関連研究を用いた（最終アクセス：2015年5月4日）。次に、各研究の題目、抄録や入手可能なPDFから明らかに関係のない研究を除外した。最後に、研究を精読し対象研究を確定した。対象研究については、内容別に原著者および年代、対象者、結果などのデータを抽出し整理した。

本研究の対象研究は、1)国内の研究である、2)対象が知的障害および発達障害である、3)学術雑誌に掲載された研究、4)尺度開発を含む調査研究を対象とした。

## 3. 倫理的配慮

本研究は文献研究であり、日本社会福祉学会研究倫理指針に基づいて引用する。用いた文献については紙面の都合上、当日一覧表を作成し配布する。

## 4. 研究結果

CiNii データベースから 892 件が検出され、スクリーニングの結果、最終的に 34 本を採用した。尺度については、「児童生徒版障害者に対する多次元的态度」、「障害児の統合教育に対する態度」の 2 本だった。態度に焦点を当てた横断研究が 22 本で、態度に影響を与える要因として、接触経験、専攻、性差や知識と態度の関連が示唆された。教育等の介入による態度変容に関する研究が 9 本で、接触経験が態度に影響することは明らかだが、接触の質によっては否定的態度に結びつく可能性が明らかになった。知的障害者本人への影響や福祉従事者の態度に関する研究はそれぞれ 1 本で、市民の態度に関する研究はなかった。

## 5. 考察

尺度は、妥当性と信頼性が十分検証された評価尺度が必要である。横断研究では、接触経験が好意的あるいは受容的態度に影響することは明らかだが、接触の質によっては否定的態度に結びつく可能性があり、態度変容には単なる接触や知識の伝達に加えた工夫が必要である。海外のスティグマ研究ではメインストリーミング教育を経験した障害者の多くがスティグマを経験しているといった報告がなされている。インクルーシブ教育が浸透する中で、接触経験の質が問われている。一方で、態度研究は教育現場における調査がほとんどであり、態度が知的障害者本人に及ぼす影響や、一般市民を対象にした研究が少ないことは課題である。教育現場だけでなく態度の経年的変化を明らかにしていくことや、一般市民の態度を変容する介入研究として、直接的接触はもちろん間接的接触の効果を明らかにすることなどが今後必要になってくるだろう。

本研究の限界は、データベースが 1 つであり、キーワードも少ないため、網羅した文献検討ではない。今後はデータベースおよびキーワードを増やしさらに知見の集積が望まれる。

謝辞：本研究は、科学研究費補助金基盤研究（C）の採択を得て行ったものである。